

## 自民党総裁選討論会 (9. 21)



写真＝ガンマプレス（栗田格会員）

# 日本記者クラブ会報

第 452 号  
2007 年  
(平成 19 年)  
10 月 10 日 発行

〒一〇〇一〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
© 社団法人 日本記者クラブ  
http://www.jnpc.or.jp

「クラブの面目躍如、会員であることを誇りに思うヨ」。久々にこんなうれしい言葉を耳にした。討論会終了後、9階のバーカウンターで水割りやワインをたのしんでいたかつての猛者記者たちの感想だ。

両院議員総会（9・23）での投票で、福田さんが330票、麻生さんは善戦して197票だった。2日後、中秋の名月の日（9・25）に福田・背水の陣内閣が成立した。

14日の総裁選告示から投票までの9日半、お二人は共同会見、街頭演説、テレビ出演と走り回った。投票日の午前中もテレビ局のはしごだった。NHKと民放で合計10回は超えたのではないだろうか。が、初めから勝負がみえていたせいもあって、どの番組でも同じ発言が目立ち、緊

滝鼻理事長あいさつ 自民党総裁候補の福田康夫さん、麻生太郎さん、お忙しい中、日本記者クラブの討論会へお越しいただき心から感謝申し上げます。

自民党総裁は事実上内閣総理大

張感に欠けて見えた。

そうした中での討論会だった。正式決定が17日、翌18日会員へ案内した。船橋企画委員長は、7月の参院選のときのメンバー（5ページ参照）で、これに当たることを決めた。

まず第一部が充実していた。冒頭の双方の「基本的な主張」もかなり練られた内容で、そのあとのディベートも緊迫感があった。第二部の質疑応答でも、お二人はきつい質問にも真摯に応じてくれた。会見はいつもそうだが、厳しい質問が出てこそ、答弁者の力量が光り、ニュースも生まれる。

しかし、成功は担当した委員だけの功績ではない。過去5回の総裁選討論会の実績がまずある。それが候補の準備や心構えに影響したはずだ。それから、会場の273人のプロの目、加えてNHKがすべてを生中継したので、日本中の視線を両者とも意識していたはずなのだ。

（専務理事 岩崎 玄道）

臣でございます。この場を利用して具体的にわかりやすい主張をお願いいたします。日本記者クラブは最強の情報発信基地です。この場を十分に活用して自由な論議をお願いいたします。

1年で3度登場

テレビメディア向きだった

こんなことがあってよいのだろうか。いくらなんでもありのタガのほぐれた世の中とはいえ、一国の最高責任者の進退までもが、こんな格好になるとは――。

9月12日午後1時、代表質問を見るため事務所のテレビをオンにした。本会議場の映像はなく、「安倍首相が辞意の意向」のニュースが繰り返された。2時からの首相の説明会見を聞いた後、いったんテレビを消す。拍子抜けというか、なんともいえない空虚感を覚えた。

内閣改造後（8・27）、官邸で行われたモーニング姿での20分の会見が反芻された。そこでも、あらためて出帆する船長さんの充実・気力は見られなかった。

それにしても、その道のベテランの見方は鋭いものと感心した。2日前の首相の所信表明を、国民新党・綿貫さんは「魂が入っていない」と看破していた。この日の突然の首相辞任には、所信表明した首相が代表質問を前に辞任するなど考えられな

いことだと前置きした後、こうした事態にしてしまった「自民党は解党すべきだ」と。

●若やかなリーダー

やはり政治は一寸先は闇だ。安倍さんが若き政治リーダーとしてクラブへ登場したのは昨年9月11日。自民党総裁選討論会のときだった。

それ以前にも官房副長官、幹事長として来ているが、このころからリーダーとしてのオーラが本格化する。小泉改革路線の継承者として、次の選挙の顔と期待されていた。圧勝が予想されていたこともあって、控室でも落ち着いた様子で、ゆったりとして大きく見えた。

2度目はことしの1月16日、戦後生まれの初めての首相としてのクラブでの新年会見。前日、外遊から帰国し、翌日は党大会という強行スケジュールのなかを、午後7時からの会見に駆けつけた。食事の時間もろくにない日程なので、貴賓室で滝鼻理事長に話す安

倍さんに、川戸委員（TBS）がバッグから茱萸ゼリーを差し出すと、なにもいわずほほえんで口に含んだ。

3度目は7月11日の参院選・7党党首討論会。デイブート術に自信を持つ安倍さんは、やや早口ではあるが、つつこみやすかしも自在で、年金などの数字にも明るかった。きつい質問にも即妙に切り返し、時々、会場に笑いを提供した。

その場で見ている限り、前半はメモをみて話すことが多かった小沢さんを上回った。現職首相ということもあるのだろうが、逆風でも7人の「役者」の中で華があったのは安倍さんだった。直後の側近やご本人の感触もよいものだったと聞く。

しかし、翌日の各紙の討論会詳報は、安倍さんにきびしいものだった。世論調査や選挙情勢の分析はじめ、デイブート合戦の勝敗だけでない、総合的な取材の結果が反映してのことだった。

実はあとで、HPに掲載するため討論会の速記録を整理していて、はっと気がついた。一見、元気がなく体調が不十分なのではとさえ思われた小沢さんの発言は首尾一貫して論理的だったのに対し、安倍発言はテレビではよいのだが、文字にすると単発的で軽いのだ。

●相次ぐ逆風に沈む

ところで、あの討論会の最後の方で、それまでも積極的にテレビの党首論戦に出ていた安倍さんに、山田委員（毎日）はこんな質問をしている。▼テレビ映りとか、デイブートのテクニクのようなことに関心が集まり、宣伝本位で議論が硬直化する傾向があるのではないか▼テレビ党首論戦が、国民が議論を整理して考える場になっているのかどうか、ちょっと疑問にも思う。総理はどう考えるか▼自分はデイブートがうまいからこれで良いと思ってるのかどうか。そのへんのことを美しい国の民主主義の在り方という視点でおたずねする。

テレビ政治の人・安倍さんの答えは公式論だった。選挙は政策を競うもの。（年金などの）数字をあげて、どちらの政策が現実性があるかを示す。そうした論戦は、国民に判断材料を提供していると思う、と。

さらに山田委員が、自分の声が国民に届いているという手応えは？と攻めた。それにも「29日までわかりません。手応えを感じるべく全力を尽くしていきたい」とそつがなかった。が、その7月29日が安倍さんにとって暗黒日になった。

（玄）

かねこ  
金子

ひでし  
秀敏

毎日新聞論説室  
専門編集委員

9・18(火) 研究会「シリーズ・中国」⑦  
司会 藤村幸義委員 出席 61人

▼共産党人事サププライズはなし



10月の中国共産党第17回党大会の人事を、1カ月前の時点で占っても占っても占った。過去の党大会人事を新聞はどう予想して伝えたか。古いスクラップブックを繰ってみると、死屍累々とといった有様だ。予想を的中させることの難しさが一日瞭然である。例えば10年前の15回党大会で、ナンバ13の喬石は政治局に残る公算大との報道とは裏腹に完全引退に追い込まれた。また、李嵐清、尉健行2人の政治局常務委員昇格を予想した報道も見当たらない。新聞だけを取り上げたが、テレビはもともと人事の予想はほとんど伝えない。

エコノミストの経済予測に倣えば、的中しなくても読者あるいは視聴者を「なるほど」と納得させるものがあるれば、プロとして通用するよ

うだ。外れても、「状況が変わった」と一言いえばそれで済む。だが、そんな心配は金子氏には不要だろう。

胡耀邦―趙紫陽―江沢民―胡錦濤と続く1980年代以降の中国のトップは、いずれも鄧小平のカリスマ的権威に基づく人事で決められてきただけに、予想のつかないことも多かった。しかし、カリスマ不在の今、17回党大会人事は初めて「制度的合法性」に則って行われ、サププライズはない、と金子氏はいう。

人口13億人の大中国の舵を取るのが党員数7000万人の共産党。その核心はわずか数名の政治局常務委員であり、人事の関心はここに集中する。金子氏によれば、当確は胡錦濤の他呉邦国(全人代委員長)と温家宝(首相)の3人。7人枠(現在は9人)なら、胡錦濤のライバル曾慶紅は残留し次世代のリーダー李克強と王兆国、周永康が入る。共産党の人材は切れ目なく育成されているようで、胡・温の次の世代、いや次の次の世代のリーダーたちについての長期展望も試みてくれた。

日本テレビ出身 高橋 茂男

たきざわ  
滝澤

さぶろう  
三郎

国連難民高等弁務官  
事務所駐日代表

9・19(水) 研究会「日本の難民、外国人受け入れ政策」司会 中井良則委員 出席 48人

▼難民受け入れの「構造的障壁」

いささか古くなった表現かもしれないが、「オブラートに包む」ようにして、滝澤さんが日本の難民問題への認識や政策の遅れを語った。「ネットカフェ難民」「お産難民」「帰宅難民」……。昨今の流行語について「難民の定義が広すぎる」と皮肉りながら、「難民とは何か」を説明。日本が国際社会から「難民に冷たい国」「難民に閉ざされた国」「責任を果たしていない」などと厳しく見られている現状を紹介した。

30年前に受け入れを始めたインドシナ難民(計一万一千人)を別にすれば、日本の難民受け入れは過去二十数年間で数百人どまりだ。百万人規模のアジアの国々、数万―数十万人規模の欧米諸国とは比較にならない



い少なさである。

滝澤さんは①日本は難民支援の資金拠出で米国に次いで貢献してきた②もともと日本に来ようとする難民が少ないなどをあげ、日本批判がすべて正しいわけではないと論じた。しかし、日本には難民受け入れに「構造的な障壁」が存在しており、それが「難民に冷たい国」のイメージを生んでいると強調した。

「構造的障壁」として、海に囲まれた国といった地理的な環境、近隣諸国との歴史、不十分な国内の難民支援体制、政府の厳格な入国管理・難民政策などをあげた。そのうえで「難民受け入れには、きわめて大きな外交的価値がある」。日本の国益にもつながることを示唆しながら、こうした障壁を打破する必要性を説いた。

国際協力とか国際貢献といえは、多くの人が「テロ戦争への協力」「自衛隊派遣」などを頭に描きがちだ。婉曲的ではあったが、この日の話は忘れられてはならない、別の形の国際協力や国際貢献があることを喚起するものだった。

朝日新聞出身 百瀬 和元

## ステイブ・ロイド・リーパー 広島平和文化センター理事長

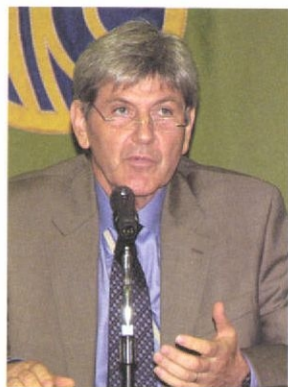
9・20(木) 記者会見 司会 井田由美  
委員 通訳 西村好美 出席 26人

### ▼全米101カ所で原爆展開催

1945年8月6日午前8時15分。言わずと知れた、広島に原爆が投下された時間である。

リーパー氏は強調した。「その瞬間、核兵器がこの世に現れ、世界は一変した」。原爆投下をめぐっては、さまざまな議論がある。米国では8割の人が「戦争の終結を早めた」と評価している現実がある。「神話を書き換えるのは容易ではない。それより私は将来に向けてどう対処すべきかを問いかけた」。

広島平和文化センターは、一人の女性被爆者の発案を基に、全米101カ所で原爆展を開催する事業を進めている。都市や大学、NGOなどが相次いで開催に名乗りを上げていく。さらに、米国の地方紙や大学の



キャンパス・ペーパーなどに、核兵器廃絶を訴える意見広告を載せる計画にも取り組む。

米国の主要な政治家は、イランへの核兵器使用も辞さないと公言する。世界の核状況はまさに危機に瀕している。リーパー氏は「核兵器がいかに危険なものであるかということ、米国の人たちに認識してもらい、米政府が核兵器廃絶へ政策を転換するように促したい」と狙いを解説する。

さらに、意見広告を出す費用をまかなうための募金も呼び掛けた。「日本は核兵器廃絶のリーダーになるべき経済力、政治力、文化的な影響力を持つている。日本に住む私たちも日本政府を動かすために声を上げる必要がある」と訴えた。

北朝鮮の核実験に対して、日本では激しい非難の声が巻き起こった。東アジアの安定と平和を揺るがす行為だけに当然のことだ。

しかし、その日本が、核兵器廃絶に真剣に取り組む姿勢を示さないのでは、私たちの訴えも説得力を持たないだろう。

中国新聞東京支社編集部長

北村 浩司

## 坂中 英徳 元東京入国管理局長

9・21(金) 研究会「日本の難民・外国人受け入れ政策」司会 中井良則  
委員 出席 52人

### ▼外国人―秩序ある受け入れ水路



日本は人口減少社会に入った。何らかの形で労働力を確保しない限り、年金、介

護などの社会保障制度を維持していくことも難しいだろう。坂中氏は「50年間で1000万人の外国人移民の受け入れを」と語り、移民を送り出してきた国から移民を受け入れる国への転換を提唱した。

2006年末現在の外国人登録者数は208万人。この10年間で1.5倍に膨れ上がったという。しかし、就労目的で日本を目指す外国人に対しては、これまで冷ややかな対応を崩してこなかった。

唯一の例外は日系移民二世、三世のUターン受け入れだ。外国人登録者の国籍別の数では、ブラジル人が31万3000人、ペルー人が5万9000人に上っている。ほとんどは

日系人と思われる。

坂中氏はその日系人家庭の現状を問題視する。「労働者本人は年金や健康保険にも入っておらず、子どもにも初等、中等教育が行われていない。犯罪に走る子どもも急増している。日本の企業も教育体制もなっていない」と指摘。貧困な支援策に手厳しい批判を繰り返した。

外国人研修・技能実習制度を使って受け入れた研修生を低賃金で働かせる事例も相次いでいる。日本経団連や内閣府の労働市場改革専門調査会などは「外国人研修・技能実習制度」の見直しを提言しているものの、根っこにあるのは、「技術・技能移転」の名で体よく職場を提供することで労働力不足を穴埋めしようという安易な姿勢だ。

就労する外国人が家族を呼び寄せるのは自然な感情でもある。「国際的な人口移動を食い止めるのは難しい。日本人の選択にかかっているが、入れる以上は、定住を含め、秩序ある受け入れの水路を開けるのがいいのではないか」と結んで、私たちに「相当の覚悟」も求めた。

読売新聞編集委員 左山 政樹

もとむら  
本村 真澄

石油天然ガス・金属鉱物  
資源機構主席研究員

9・26(水) 研究会「ロシア エネルギ」中井康朗委員 出席 92人

▼独自の資料駆使し冷静な分析



ロシアは資源大国である。原油生産量はサウジアラビアに次ぐ世界2位

だし、天然ガス生産量は世界一だ。

ソ連崩壊後、原油、天然ガスとも生産が落ち込んだが、復活し、経済発展の原動力となっている。本村氏はその資源大国の現状と今後について詳細な資料を駆使し見解を述べた。

取り上げたテーマは最近話題になった北極海の大陸棚延伸問題からパイプライン・プロジェクト、ロシア石油・ガス産業の動向、サハラ以南の問題など多岐にわたる。

ロシアの資源政策は時に熱い議論を巻き起こし、日本を含め米欧では批判にさらされることも多い。しかし、本村氏は冷静な分析を基礎に独自の見方を披露した。それは一般に報道されている見方とは異なる場合もあるが、現地取材も踏まえている

だけに説得力がある。

たとえば、日本の三井物産と三菱商事も参加するサハラ以南の権益の過半数をロシアのガスプロムが手に入れたことについてである。

ガスプロムがロシア政府と一体となって環境問題を口実に強引に割り込んだという見方が報道されたが、石油産業の世界では権益譲歩は参入側も受け入れ側も、双方で歓迎されるもので、今回もそうだったと強調した。

西側ではロシアがエネルギーを政治的圧力の手段に使っているとの批判も強い。ロシアは昨年1月にウクライナへの天然ガス供給を一時止めた。親米欧路線を取るユーシチェンコ政権に圧力をかけたとの見方も出たが、ウクライナがロシアの天然ガスを運ぶパイプライン通過国としての責任を果たしてこなかったことが問題の本質であるという。

ロシアは今年1月にはベラルーシに対して原油輸出を一時止めたが、この紛争についても本村氏はベラルーシ側に厳しい見方を示した。

日本経済新聞論説委員兼編集委員

小田 健

自民党総裁候補討論会メモ(9・21)

▼時間…13:05~15:12 ▼第1部(48分) …立候補にあたっての基本的な主張(持ち時間10分)の後、候補同士の討論。持ち時間10分で、相手候補の政策の疑問点、問題点などを質してディベート。最後に両候補が3分ずつまとめの発言▼第2部(79分) …会場の出席者から寄せられた質問を参考に企画委員会の代表が質問し、争点や問題を明確にして第1部の議論を深めた ▼総合司会…川戸恵子、第1部司会…影山日出夫、第2部の代表質問者…橋本五郎、山田孝男、宮田謙一、長谷部剛

の各企画委員▼取材185人、スチル代表の東京写真記者協会8社、テレビ、ラジオ中継、ENG関係などを含め合計273人▼放送はNHKが総合テレビと衛星第2で生中継(ラジオも同様)、民放はTBSが代表で中継取材。午後の情報番組や夕方、夜のニュースで取りあげた。ENGはニュース映画協会代表TBSのほかAP、ブルームバーグ、CNN、朝日ニュースター、共同通信▼視聴率…関東4.1%(第1部4.2%、第2部4.0%)。関西3.7%(第1部3.7%、第2部3.7%)。

■村上春樹のファンです

—新会員・メイツアッド広報官

駐日イスラエル大使館で広報と文化を担当するハダス・メイツアッドさんが8月末に着任した。入省2年目で初の海外勤務。「経済発展の続くアジアに関心があった。日本への好奇心もあったが、2国間関係の仕事が最も充実していそうなので希望した」と▼両国関係は最近ますます



蜜月時代という。政府首脳の間相互訪問や「平和と繁栄の回廊」を提唱し、日本が中東和平に

積極的に関与していることが大きい、と語る。「魚を与えるより、魚をとる方法を教える実践的な日本の政策は高く評価されている」▼中東情勢については、認識がイラク戦争後大きく変わり、単純なイスラエル対アラブの対立図式ではなくなっている、という。アラブ諸国の中の穏健派對過激派の様相が強まっている、とも▼村上春樹のファン。ヘブライ語訳が多数出版されており、最近『海辺のカフカ』を読んだばかりとか。女性の兵役は通常2年だが、8年にわたり空軍にソフトプログラマーとして勤務し、最後はキャプテンで退官した。(石川)

## 2度の国外退去命令 ——イラン革命とイライラ戦争のころ——

有泉 一雪

イラン革命の取材が一段落したころの1979年11月、テヘランのアメリカ大使館がイラン人過激派学生に占拠された。直ちにテヘランにとんだ。

アメリカ大使館は街の中心部にあって、広い敷地は四方が鉄格子で囲まれており、4階建ての大使館に忙しく出入りする過激派学生は男子がTシャツにGパン姿、女子はコーラの掬を守ってチャドルで身を包んでいた。

大使館に日参し、鉄格子越しに彼らとの接触を試みるが、ほとんどの学生は完全にわれわれを無視し、振り向いてすらくれない。しかしこっそり対応してくれた学生は「アメリカが武力による人質奪回を計画している」という情報が流れているが」との間に、大使館内には自動小銃

や手榴弾などの武器がすでに準備されていることを教えてくれた。

### ■ホメイニ師不敬罪？

1980年を迎えて早々、イラン情報省から「あす10時に出頭せよ」とのメッセージを受け取った。緊急に開かれる記者会見の通知かとたかをくくっていたら、出頭命令を受けたのは、どうやら私だけのようだ。何事かと思ひながら、情報省を訪れた。

担当のナハヴィー国際局長の口から「あなたの放送局は番組の中で、最高指導者ホメイニ師を大変侮辱した。イラン政府の抗議の意思として、あなたの処遇の変更を検討している。追って連絡があるまで、一切の取材活動を禁止する」と通告され、その場で記者証を取り上げられた。

思いもかけない話に驚き、詳しい内容をたずすと、「動物園のサルがホメイニ師に似ているとアナウンサーがコメントしたこと」「処遇の変更には私の国外退去が含まれること」などの点が伝えられた。

本社と連絡をとったところ案の定、新年恒例の干支に関する話題が問題の発端ではないかとのこと、こじれないようにと願ひながら、当面は相手の出方を待つこととした。

数日後、呼び出しに応じてナハヴィー氏に会うと、「革命にともなう情報省内部の混乱のため強硬派の意見に振り回され、迷惑をかけた。慎重に検討した結果、ホメイニ師への侮辱問題はなかったことで処理することとした」との決定が明らかにされた。

多少むつとしながらも、情報省が

常識的な結論を出したことに安堵し、国外退去という処分が消滅したことにほっとした。

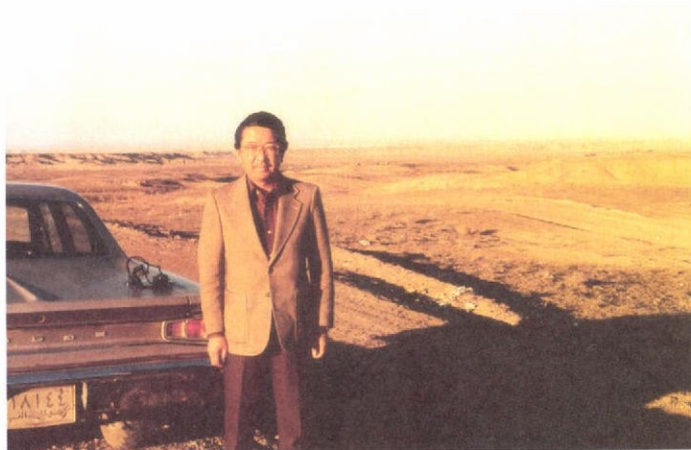
別れ際にナハヴィー氏は「天皇陛下を侮辱すると重罪が課せられる時代が日本にあったと思う。ホメイニ師を絶対者とする情報省内部の強硬な連中の気持ちも分かってほしい」と付け加えた。

この発言には率直に言ってビックリした。不敬罪という亡霊がこともあろうに、革命の地イランで突然姿を現した格好だ。ナハヴィー氏の博識に感銘したが、と同時に、日本の歴史に対する認識を共有していることが一瞬にして2人の間隔を縮めたことを意識した。それから話が弾み、シリア派の聖地コムのモスクでパレヴィイ国王軍と戦った体験談を聞かせてもらった。有意義で楽しいひとときであった。

### ■アンマンからタクシー1千キロ

この年の9月、国境問題の解決を大義名分にイラクはイランに攻め入った。8年に及んだイランイラク戦争の勃発だ。本社から電話があり、速やかにバグダッドに行くよう指示された。

イラクへの空路はすでに、すべて閉鎖されていたので安全な陸路を探



バグダッドへ向かう砂漠の一本道で（1980. 10）撮影は一緒に現地を目指した黒岩徹毎日新聞ロンドン特派員（当時）

した結果、中東地域での政治的な立場や地理的利便さを考え、ヨルダンのアンマンを出発地とすることとした。アンマンからバグダッドまでは真東におよそ1千キロ、乗客1人1万円相当の片道運賃でタクシーの運転手と話をつけ、明けやらぬうちにアンマンを出た。

砂漠の中の本道を、遠くに蜃気楼を眺め、冷房装置がないのに窓を閉めたまま、行きかう車もない道路をひたすら東に向かった。運転手に「窓は閉めているほうが暑さをしの

げる」と言われ、素直に従った。

夜遅く着いたバグダッドの街は灯火管制で真っ暗だ。太平洋戦争中の経験を思い出し、戦地に近づいたという緊張感がじわりと迫ってきた。

開戦間もないバグダッドではほぼ毎夜、対空砲火が街の隅々に響き渡り、機関砲の弾が火花のように夜空を飛び交った。その先には当然イランの戦闘機が見えるものと思っ

て目を凝らしたが、意外なことに機影は全く見えず、また耳を澄ましても一向に爆音は聞こえなかった。空襲で飛来する戦闘機が1万メートル近い上空を飛行することはありえず、狐につままれた思いにとらわれた。

あくる日のバグダッドブレティンには「イラン空軍機36機撃墜」の見出しがおどっている。その日によって多少数字は違うものと同じようなニュースが毎朝伝えられるようになった。

敵機の見えない空襲や多数のイラン戦闘機が撃ち落とされていることについて、イラク政府はわれわれの疑問に全く応えようとしなかった。ある朝、スペインの新聞「エルム

ンド」の記者が警官によって強引にバスで連れ去られる場面に出くわした。彼の同僚に理由を聞いたところ、「バグダッドからの嘘」という記事を書いたために、事情を聞きたいと言って連行されたのだと教えてくれた。

またこの記事は「撃墜された戦闘機の数をすべてまとめると、イランにはF4ファントムが一機も残っていないことになる」と書いていると話してくれた。当初は、マスコミに協力的であったフセイン政権が広報活動については舵を大きくきったことをこの出来事は示唆していた。

#### ■大使夫人から梅干しのおにぎり

案の定、その2日後バグダッドに駐在する全外国人特派員に招集がかり、ホテルの広間に集められた。席上スポークスマンはイラク政府の決定として「タイムズ、ニューヨークタイムズ、BBC、CBS、AP、ロイター以外の特派員は速やかにイラクを出ること」と命令口調で述べた。会場は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。

理由を明確にせよとの私たちの要望に対する答えは、「日本のジャーナリズムは国際的な影響力を持たない」の一点張り、執拗な抗議に対し

スポークスマンは「イラク政府の決定に従わないものは逮捕する」との最後通牒を突きつけてきた。

納得できる妥協点が見つかればとの思いでイラク駐在の加賀美大使にお願いし、イラク外務省と話しあってもらったが、この件は箸にも棒にもかからないということだった。

バグダッド滞在ちようど1週間、取材の本番はこれからという矢先の国外退去、反撃できない暴力に一方的に叩きのめされたような不愉快な気分を腹に収め、バグダッドを後にした。

別れ際に大使夫人からいただいたお土産、それは梅干しのおにぎりだった。砂漠の真ん中で皆でいただいたおにぎりが鬱憤を晴らしてくれた。



ありいずみ・もとゆき会員 1936年生まれ 59年文化放送 63年フジテレビジョン移籍 ニューヨーク特派員 解説委員 ロンドン支局長など ポニーキャニオン(出向)取締役 ポニーキャニオンエンタープライズ専務取締役など 2001年退社

平河クラブ

前日夜、決意は固まった

▼石橋 文登  
(産経新聞社)

小泉純一郎元首相のサインを見たことがあるだろうか。最後の「郎」の「おおざと」の「ー」が異様に長いのが特徴なのである。

さて、9月23日午後自民党本部8階ホールで行われた両院議員総会。安倍晋三前首相の突然の辞任表明を受けて実施された総裁選のクラ イマックスでは、やはり小泉氏の動 向に注目が集まった。

小泉氏は総裁選告示直前に中川秀直元幹事長に「次は福田さんでいいじゃないか。彼なら最前線でやるよ」と福田氏支持を明言したとされてい たが、いざ投票でだれの名を書くか は分からない。現に福田氏の対抗馬 となった麻生太郎前幹事長に流れた 国会議員票131票の約半数は、表 では福田氏支持を明言しながら「麻 生太郎」と書いた「隠れキリシタン」

たちだった。

総裁選選挙管理 委員会に名前を呼 ばれた小泉氏は、 飄々とした表情で 演壇に並ぶ投票台 に立ち、投票用紙 にペンを走らせ

た。その右ひじの動きを近くで注視 していたある若手議員はこう断言す る。  
「小泉氏は最後の一筆を縦に長く 引っ張った！」

果たして小泉氏が書いたのは「福 田康夫」だったのか。それとも「麻 生太郎」だったのか。

安倍氏が首相辞任を決断した原因 は「消化器系の疾患」であることは 間違いない。最近はずいぶん回復し たようだが、9月12日に辞任会見し た際は「気力だけで立っていた」ほ ど重症だったそう。翌13日に緊急 入院後、1週間以上食事を一切受け 付けず、栄養点滴だけで過ごしてい たという。

安倍氏が体調を崩す引き金となっ たは8月19〜25日のインド・東南ア

ジア外遊だった。もともと胃腸が弱 い安倍氏にとって「香辛料の国」で の強行スケジュールは酷であり、参 院選とその後の自民党内の「安倍降 ろし」の動きによる心労がドツと吹 き出たようだ。

その後体調は崩れる一方だった。 9月9日のシドニーでの「職を賭す」 発言は、「何があってもテロ対策特 別措置法の延長だけはやり遂げる」 と自らに奮起を促す発言だったが、 翌10日の所信表明演説を終え、体力 の限界を感じたようだ。

最終的に辞意を固めたのは11日夜



官邸での会見—首相の辞意表明に大勢の記者がかけつけた (9.12) =産経新聞社

だった。首相公邸で側近の秘書ら数 人に「明日辞意を表明する。あらゆ る方策を考えたが他に道はない」と 打ち明けた。秘書らは涙ながらに説 得を試みたが、安倍氏の決意は揺る がなかったという。

両院議員総会には、病床の安倍氏 からメッセージが寄せられた。

「政治空白を招いたことにより、 麻生太郎幹事長をはじめ、自民党所 属国会議員、党員・党友、そしてす べての国民の皆さまに心よりお詫び 申しあげます」

実は安倍氏は総会の冒頭でメッセ ージを朗読するように求めていた が、総裁選選挙管理委員会は「国会 議員の投票行動に影響が出る」と判 断。開票後に谷川秀善両院議員総会 長が代読した。

なぜ影響があったのか。実名が挙 げられたのは麻生氏だけだったから だ。安倍氏は病床で周囲に「麻生氏 には本当に申し訳ないことをした」と 何度も漏らしたという。安倍氏は 不在者投票でだれに投じたか口をつ ぐむが、まあ自明と言えるのではな いか。

安倍首相、突然の辞意表明

いしはし・ふみと 1990年入社 大阪 社会部などを経て 02年東京政治部 現 在 平河クラブ



## 事態の急変

## 見えないものを視て

▼大山 寛恭

(東京放送)

思えば、7月29日の参議院選挙の夜。JNN開票特別番組は、冒頭から自民党の「歴史的な大敗」を予測。首相退陣が必至と見られていた矢先、スタジオ出演中の私に急を告げる取材メモが差し入れられた。

午後8時38分、「辞めない意向」と読み上げ、これが「続投」の第一報となった。

担当記者は、退陣に向けた官邸の兆しがあったことをこの日、見逃していない。進退をめぐる首相の心中奥深いきしみも…。

## テレビ速報

暑い夏を過ごした首相の異変は、9月に入る頃、具体的な内容を伴って一気に深まりを見せた。6日夕、官邸で憔悴した首相を目の当たりにした私も、デスク・キャップに「退陣必至」と注意喚起のメールを送ったほどだ。

政治家の進退は、政治的な生死を意味し、最も精度が求められるニュースだ。

う。しかし、心情は見えない。テレビが得意とする「現場」も「映像」もない。にもかかわらず、決定的な瞬間を、いかに速く正確に伝えられるか。見えないものを視て、一刻も速く。ましてや、一国の最高指導者なら。

所信表明の翌11日深夜、キャップと担当記者は記者会館で辞任速報の文案を練り、最終取材とオンエアに向けて、限られた部員が息を殺し動き始めた。

12日午前11時、代表質問を控え賑わう国会を訪れていた私の携帯電話が鳴り、事態の急変を告げた。本社では、速報がスタンバイされ、編集部門から厳重なチェックが入った後、午後0時48分22秒、「安倍首相が与党幹部に辞意伝える」と速報、1分後にはロイター電が引用し衝撃を世界に広げた。

政治家の死が「辞任」ならば、生を意味するのが「当選」。参議院選挙の当確も辞任も、テレビが得意とする現場や映像を欠きながら速さを競う特殊なニュース分野だろう。

カメラ目線にまでこだわりの見せた首相。テレビは、「辞意」の小さな2文字で突然、政治的死を告げた。おおよま・ひろやす 1983年入社 06年から政治部長

## そよ風程度？

## 小沢代表は淡々と

▼小倉 進二

(共同通信社)

安倍晋三首相(当時)の退陣表明は、シドニーで開かれたアジア太平洋経済協力会議(APEC)に出席する首相の同行取材から帰国後、野党担当になって3日目の出来事だった。一瞬、野党取材にも強風が吹き荒れるかに見えたが、そよ風程度にしか感じなかったのは、民主党に政権担当能力ができてきたからか。

安倍首相の所信表明に対する衆院の代表質問直前の午後0時50分ごろ、民主党は代議士会の最中。質問に立つ鳩山由紀夫幹事長が「全員野党で大きなホームランをかつ飛ばして安倍政権を飛ばしてしまいましょ」と氣勢をあげていたところ、国対関係議員の出入りが激しくなった。記者団が「何かあったのか」と不審に思い始めたころ、TBSのニュース速報が既に「首相辞意」を打っていた。

担当者はコメントを取るべく、幹部を追っかけた。

幹事長番は代議士会後、参院地下のそば店「藪伊豆」に向かう鳩山氏にICレコーダーを突きつけながら移動。菅直人代表代行とそばをすすり終わる鳩山氏を待って、店前でカメラ付きのぶら下がり。ちょうど、記者会見中だった国民新党の亀井静香代表代行は記者の質問に開口一番「うそだろ?」。その後、亀井久興幹事長は記者のワンセグでテレビから情報収集した。

当初は、野党クラブにも「大変だ」との空気が走ったが、その後は、冷静な取材活動が展開された。自民党に對峙する民主党が総じて落ち着いた対応に終始したからと言える。

小沢一郎代表は当日、他の幹部から緊急役員会の開催を要請されたが拒否。「安倍首相が辞めたからといって関係ない。淡々とやればいい」と対岸の火事を決め込み、当初の予定通り、「次の内閣」(国会、記者会見、夜には参院選初当選組との会食をこなした)。

周辺は「経験の差」と小沢氏の貫録を強調するが、老練さでは福田康夫新首相も引けを取らない。衆院解散、総選挙に向け、さらに野党取材は気が抜けない。

おぐら・しんじ 1993年入社 官房長官番の後 9月から野党クラブ

● テノール歌手 パパロツティ死去

## 音楽記者も速報態勢で

▼宮下 博

(読売新聞社)

世界的な人気テノール歌手、ルチアーノ・パパロツティが重体、という報が日本にも届いたのは、台風9号が関東を直撃した9月6日の午前中。死亡予定稿を引っ張り出したのも東の間、東京の夕刊最終版が行ったすぐ後に、死去が伝わった。

ローマ特派員電に東京文化部の業績素材を加え、翌日の朝刊社会面に掲載することが慌ただしく決まった。

### ■朝刊文化面に追悼記事

そして、識者による追悼原稿を、いつ紙面化するかの判断にも、すぐ迫られた。このところ全国紙では、従来の夕刊だけでなく、朝刊にも文化面を設ける社が増えた。初報と同じ朝刊の文化面に、追悼記事が掲載できればインパクトは大きい。

台風の影響で紙面の制作行程が大幅に繰り上がる中、文化面の記事差し替えが急きよ決定。原稿を依頼し

た社外の音楽評論家には無理を言って早く仕上げてもらい、締め切り時間ぎりぎりの作業を続けた。結果として、理想的な紙面展開ができた。

音楽担当の記者など、自分の好きなことだけ出来て気楽なものだ、と他のニュース部門からは思われるかもしれない。だが、取材・執筆に専門知識の蓄積が必要なのは昔と同じうえ、右記のように面立が変わって、スピーディーなニュース対応が重要となった今、音楽記者の動き方は変わって来ざるを得ない。

訃報記事はその一例だ。音楽に限らず、文化部が担当するジャンルには有名人が多い。「死亡」はスクープの対象になるし、いかに充実した訃報とするかは他紙と競争だ。パパロツティ最後の来日となった2004年春、歩くのもやっとの状態で記者会見場に姿を現した時は驚いた。公演中も立って歌えず、いすにもたれる姿に不安を覚え、すぐさま死

亡予定稿を手厚く更新した。国内の長老音楽家では、その動静にアンテナを張り、いざという時の情報網を日ごろから築く作業を続ける。

### ■コンサートへは年間200回

一方、日本国内のクラシック音楽ファンは、人口の1%程度と言われる。人気漫画「のだめカンタービレ」でクラシックに興味を持ち始めた、移り気なグレイゾーンも読者の対象として意識する必要がある。

本紙は日替わりメニュー編集の夕刊芸能面で、毎週火曜日付を「クラシック・舞踊」に充て、他紙より多くの紙面を割いている。音楽家へのインタビューをはじめ、公演情報や寄稿による演奏会評、時には音楽祭やコンクールのルポを扱い、多彩な構成を心掛けている。ポピュラー畑とクロスする記事を書かねばならない時もある。朝刊の文化面には時事的な題材を送るなど、紙面の細かな使い分けを実行しており、過日の牧歌的な紙面作りとは様変わりした。

実際に生の演奏が行われるホールは、音楽記者にとって重要な取材現場でもある。批評記事の対象を含め多くの演奏会へ足を運び、音楽家の現状を確認する。筆者の場合、年間で約200回(国内180回、海外

で20回程度)が平均的な出席ペース。ルネサンス期から現代音楽、単独リサイタルから大掛かりなオペラまで、音楽界の潮流を踏まえて幅広く目配りし、感覚を磨く。

### ■経済的視野からの掘り下げも

仕事で行くからには、内容が低調で、忍従を強いられる公演にもぶつかる。経験的に、感心するのは全体の2割、普通の仕上がりは半分、残り3割は疑問符というのが相場だ。この比率は、レコード会社から毎月送られる、数多い新譜CDの出来にも、ほぼ当てはまる。演奏会評の書き手も、新聞社側で若い才能を発掘し、育てる必要性が高まってきた。

さらに視野を広げ、音楽界と経済・社会の結び付きを掘り下げる努力を忘れてはならない。本紙はここにこの分野開拓に注目し、年間50億円もの血税が注ぎ込まれる新国立劇場の運営問題や、各地に乱立した音楽ホールの経営、レコード会社など音楽産業の行方を追っている。

音楽界の宣伝文句を鵜呑みにせず、相応の批判精神を持って取材・執筆に当たるのは大前提である。

みやした・ひろし 1988年入社 経済部を経て 東京本社文化部 99年からクラシック音楽担当

日本新聞協会賞受賞

## 新たな「貧困」顔出し報道が訴えたもの

▼中嶋 太一  
(日本放送協会)

「ワーキングプア」は当初「日本の貧困」という仮のタイトルがついていた。その名の通り、取材班の狙いは日本社会にある「貧困」と真正面から向き合うことにあった。しかし、「貧困」という言葉について疑問も持ち上がった。「貧困」とは世界の国々で発生している飢餓のことを指すのではないか、日本では「貧困」と呼ぶだけの事態は起きていないのではないかという疑問である。その疑問を解消したのが「ワーキングプア」という言葉との出会いだった。

### 教授の一言がヒントに

実は取材を始めた当初、私たちはこの言葉を知らなかった。ディレクターの一人が若者の雇用問題などに詳しい放送大学教授の宮本みち子さんから、「ただだけ働いても報わ

れない人たち『ワーキングプア』が大勢生まれ、川底に滞留している」と聞いてきたのである。

そして記者やディレクターが全国に飛んで取材した結果、まじめに働いているのに生活保護水準以下の生活を強いられる「ワーキングプア」が急増している現実が明らかになった。その新たな「貧困」の存在を今こそ世に問わなければという思いが、「ワーキングプア」というタイトルに結びついていったのである。

### 信頼を得るまで訪ね続け

では、どのようにして取材を進めたのか。それはいたって単純な方法だった。「ワーキングプアの人たちに聞け」——ただそれだけである。

政府のどの機関も「ワーキングプア」に関する基礎的なデータを持ち合わせていなか



ホームレスの若者に半年間密着した

今回の「顔が出ないのなら応じる」という申し出が多かった。ホームレスの若者も当初は、顔出しの取材をことわっていた。しかし、何度も通って日頃の生活をともにし、この問題を世に問う意義を伝えるうち、2カ月近くたって、撮影を承諾してくれた。

った。それなら自分たちの目で確認しよう、ある記者のグループは、所得があまり高くない人たちが住む東京の団地を、一軒一軒訪ねて回った。ホームレスの若者に半年間密着取材したディレクターや、ハローワークの前で仕事を探しに来る女性に声をかけ続けた記者やディレクターもいる。取材した相手はざっと数えただけで千人を超えている。

取材には大きな壁があった。それは取材班が「ワーキングプア」の人たちの顔を隠さずに撮影することにこだわったからである。最近、テレビではプライバシーへの配慮といった理由で顔を隠したり、声を変えたりして放送することが多い。

睡眠時間を4時間に削って働くシングルマザーの母親も、当初は「テレビに出ると仕事を失うかもしれない」と心配していたが、繰り返し会って本音で話をするうちに願いを聞き入れてくれた。

### 「勇気」と「覚悟」が実る

今回、取材を受けてくれた方々がカメラの前で顔を隠さず、ありのままの姿を見せてくれたこと、その「勇気」や「覚悟」が全国の人々の胸をうち、大きな反響につながったのだと思う。今回のキャンペーン報道をきっかけに、これまであまり馴染みのなかった「ワーキングプア」という言葉が一気に社会に広まった。この問題に関するシンポジウムが各地で開かれ、政府も対策を打ち出すようになった。

しかし、何よりうれしかったのは取材を受けてくれた方々が、「自分がテレビに出たことで少しでも社会が変わったのなら良かった」と受け止めてくれたことだ。取材班はいま、この問題をどうすれば解決することができるのか、対策を探る「ワーキングプア3」の取材を進めている。

なかじま・たいち 1987年入社 04年から社会部副部長 「ワーキングプア」取材班代表

次世代の路面電車

# コンパクトなまちづくり 高齢者の利用急増

▶ 浜浦 徹

(北日本新聞社)

富山ライトレールは2006年4月29日に開業し、まもなく1年半を迎える。7色の車両の「ポートルム(愛称)」すべてに低床型を導入、全電停をバリアフリー化し、デザインを統一した全国初の本格的LRT(次世代型路面電車システム)だ。今では富山市民の足として定着し、予測を大幅に超える利用がある。視察や観光利用で経済効果を生み、沿線では民間投資の動きも出始めた。

利用者が減り、廃線が懸念されていた富山市北部地区を走るJR富山港線を市が譲り受け、既存の線路を使う6・5キロ区間に路面電車区間



開業1年半 市民の足として定着したポートルム

(1・1キロ)を加え、新たな乗り物として再生した。公設民営の考え方で、第三セクターの富山ライトレール株式会社(社長・根塚俊彦前富山市都市整備部長)が運行する。

開業前の目標は、1日3400人の利用。JR富山港線の2002年の売上額などから換算した数字だ。達成すら危ぶむ見方もあったが、開業してみると、2006年度は1日平均4901人が乗車した。これまでの累計で約250万人に上り、本年度も1日平均4600人の利用が続いている。市と国交省の調査によると、JR富山港線時代との比較で60代以上の利用者が休日で7・4倍、平日で3・5倍に増えた。家に閉じこ

もりがちだった高齢者の外出を促すという想定外の効果を生んだ。冬柴国交相ら閣僚、LRT先進地のフランスの鉄道関係者をはじめ、2006年度に547団体4712人が視察に訪れた。2月に中心市街地活性化基本計画が国の第1号認定を受けた中心部への視察と合わせると、市は約3億円の経済効果があったとみる。

終点の岩瀬地区では、観光客が急増した。軌道と並行する運河の拠点交流施設「岩瀬カナル会館」は2006年度、開業前の7倍を超える7万3317人、北前船交易を支えた回船問屋のたたずまいを残す国指定重要文化財「森家」には3倍の4万8104人が訪れた。人口減少が進む沿線では、30区画の住宅団地が造成され、中心部に位置する城川原―蓮町の人口は1%増加に転じた。来春には近くで高齢者向けアパートを備えた多機能型福祉施設が開所する。

すべてが順調というわけではない。開業に伴い、交通事業者の富山地鉄が、奥田、柳町地区を通って中心市街地まで走らせていたバス路線を廃止。従来の公共サービスが低下したとみる同地区の住民の不満を生

んだ。車と併走する市道の一部区間では、車との接触事故が多発した。樹脂を使った「制振軌道」を採用し、騒音や振動を抑えたことで、ドライバーが電車の接近に気付きにくくなったためだ。

市は10月から、これまで中心部に限定していた居住推進策を、市全域の鉄道や路面電車の沿線、主なバス停周辺まで広げた。市民や業者を対象に、住宅購入や建築を補助する仕組みだ。LRTの導入が、市の目指す沿線で暮らしやすい「コンパクトなまちづくり」を実現するツールとなるか、今後も注目したい。

はまうら・とおる 1991年入社 社会部 立山・上市支局などを経て2004年から政治部次長

### 一口メモ 富山市—コンパクトなまちづくり

人口418,117人(8月現在)156,257世帯(同)  
面積1241.85平方キロメートル  
富山駅に集積する鉄道や路面電車、バスに「団子」な富山が、沿線での「コンパクトなまちづくり」を実現する。富山駅に集積する鉄道や路面電車、バスに「団子」な富山が、沿線での「コンパクトなまちづくり」を実現する。富山駅に集積する鉄道や路面電車、バスに「団子」な富山が、沿線での「コンパクトなまちづくり」を実現する。

## 甲子園・佐賀北の快挙

“普通校”優勝が  
残したものの▶大鋸 宏信  
(佐賀新聞社)

9月22日。甲子園で劇的な逆転優勝を果たした日からちょうど1カ月後。新チームとなった佐賀北高校ナインが秋の九州地区大会佐賀大会1回戦に登場した。

会場の嬉野市のみゆき球場は、学校がある佐賀市から車で1時間以上かかる距離にあるが、地方大会の1回戦としては県外組を含む。異例の約500人の観客を集めた。地元佐賀市であった続く2回戦は約1000人。優勝直後の異常ともいえない「佐賀北人気」をうかがわせた。

県立普通高校の快挙。甲子園取



多くの市民が駆けつけた佐賀北ナインの凱旋

材から久しぶりに佐賀に帰ると、会う人会う人によく聞かれたのは「なんで、北高が優勝できたの？」ということだった。返す言葉は決まっていた。「正直、分かりません」。

連戦を勝ち抜き体力強化が功を奏した、相手チームの戦力を冷静に分析し勝つ野球に徹した、最後まであきらめない姿勢で甲子園ファンを味方につけた。勝ち進むごとに紙面に掲載した「勝因」と優勝後の検証記事には、いろんな要素を盛り込んでいるが、結局、ひとりで語れる「決め手」などはなかった。

野球の裏金問題に端を発した特待生問題は、今年の高校野球界に暗い影を落としていた。そんな年に、特

待制度とは何の関わりもない普通の高校が優勝したことに全国の注目が集まった。

佐賀北は確かに「普通の学校」だ。それはチーム内の呼び方に象徴される。「うちの生徒」。百崎敏克監督は部員を決して「うちの選手」とは呼ばない。部員も「監督」とは呼ばず、「百崎先生」と呼ぶ。監督と選手の関係ではなく、あくまで学校の先生と生徒という関係だ。

そんな生徒たちが全国制覇を成し遂げたのだから、スポーツ紙やテレビの全国ネットが大々的に取り上げるのも無理はなかった。

しかし、県内の高校球界の事情を考えると佐賀北の躍進は納得できる部分もある。県内には飛び抜けた私立高はなく、中学時代に活躍した選手の多くは、13年前に全国優勝した佐賀商をはじめ県立高に進学する。その中で佐賀北は「野球も勉強も精いっぱい頑張りたい」という生徒たちの受け皿という位置づけだった。

そんな構図の中、県立普通校の神埼を春夏連続で甲子園に導いた百崎監督が3年前に就任。そこに優勝チームで主力を担った捕手の市丸大介主将や久保貴大投手、逆転満塁本塁打の副島浩史三塁手ら、中学時代か

ら注目された選手が監督を慕って入学してきた。全国的には無名でも、県内では能力が高く、基本技術がしっかりした選手が集まったチームだった。ある程度の能力を持った選手を長期的な視野で育て、適材適所に当て込むことで、公立校も甲子園で戦える。そのことを示した意味でも佐賀北の優勝の意義は大きかった。

甲子園の後、3年生は国体に向けた練習と勉強に励んでいる。ほとんどが大学進学を希望し、硬式、準硬式などで野球を続ける予定という。新チームを含め、優勝ナインへの注目はまだまだ高いが、できるなら早く「普通」の高校生に戻って、落ち着いた学校生活を送ってほしいと願っている。

おおが・ひろのぶ 1991年入社  
万里支局 整理部などを経て 2006年  
4月からスポーツ担当

## 一口メモ 佐賀県の高校野球

佐賀県高校野球連盟に加盟する学校は県立37校、私立5校の合わせて42校。今年度の全国選手権大会佐賀大会には41チームが参加した。少子化の影響で高校再編も進んでおり、来夏は40チームに減る可能性が大きい。特待生問題では私立の4校が違反を申告したが、私立優位という状況ではなく、むしろ県立校が実績を残している。過去10年の夏の甲子園出場校を見ても、県立の普通校が5回、実業系校が3回、私立はわずか1校の2回にとどまっている。

## リベラル21

私たちは選挙・選挙・選挙を掲げてインターネット上に市民のメディア、リベラル21を創った。

## ネット上の“壁新聞”で論議

<http://lib21.blog96.fc2.com/>

岩垂弘、大貫康雄、丹藤佳紀、前田康博といった面々が集っているし、高名な人権弁護士や金融界のOBも健筆をふるっている。さらに画家、詩人（いずれも女性）と

いった異才も。そしてどうしても欠かせないのが画面を作り、管理するエンジニア。ここに人材を得たことが、このブログの生存を支えている。始めてからほぼ半年が経過したが、この間にのべおよそ6万人が読みに来てくれた。この数字はブログの世界では多いほうではないだろうが、生真面目な文章をこれだけの人が読んでくれたのだからもって瞑すべしと思っている。なんで人数がわかるのか。これがわかるのである、毎日何人が読んだかが。一日大体数百人だが、ちよつと刺激の強い文章を載せたときには、それが1800人近くに跳ね上がったこともあった。この敏感な反応がなんともたまらない。読者の真面目な投書を画面に出して、執筆者とやりとりもする。われわれの周りに一つの世界が出来つつあることを実感する。そこでお願い。まず一度「リベラル21」へご来訪いただきたい。そしてできれば、時に原稿をお寄せいただき、やがてはぜひ同人に。リベラル21代表 田畑 光永 (TBS出身)

政治記者OB会「休眠」へ  
28年間に「秘史」6巻

在京の新聞、通信、テレビ、ラジオ各社の政治記者OBで構成され、1979年以降、活動を続けてきた「政治記者OB会」が、6月に開いた最終総会で「活動中止」を決定、事実上休眠することとなった。

現役記者当時、特ダネ合戦でしごぎをけずったかつての政治記者たちが、OBになってから集まって会合を開き、会報を出すまでに至ったのは、ひとえに「歴史、とりわけ政治史に真実を伝え残す」という使命感から出たものだった。28年間に6巻発刊された『政治記者の目と耳』の第1巻に、この会の結成に奔走し、

常任世話人を務めた戦前の報知新聞記者、小楠正雄氏（故人）が「私の目と耳の記録は、史実の一面面を写し出す価値が十分にある。もしこれらの事実を書き留めておかなければ、やがて単なる個人の語り草としてうたかたの如く消え去る運命にあるのだ」と記しているのが、政治記者OB会の本質を描いている。

最終総会には、発足時からの常任世話人である太田博夫（朝日）鈴木

哲夫（共同）今井久夫（産経、時事新報）の各氏が出席、今井氏が28年の間、終始、会の活動を支えた桜田会（旧改進黨系）の物心両面の支援に謝意を表した。OB会の「休眠」は、港区の「新桜田地区再開発計画」により、桜田会のある東京桜田ビルや飯野ビルの再開発工事が近く行われ、桜田会自体が「支援継続は困難」との考えを伝えてきたためだ。

最終総会の案内状発送は180通、当日出席者は38人だったが、出欠の返事をしたためたハガキには、「OB会の活動継続の方策をさぐってほしい」との意見が圧倒的に多かった。

今井氏は「あと5年待てば、わが桜田会も新装成って近代ビルとなる。新たに定款を設けて政治記者OB会へのご協力を期待する」と述べ、「5年我慢すりゃ生まれ変わると確信する」と休眠を残念がりつつ、5年後への期待感を示していた。

政治記者でなければ知り得ない政治の裏側、秘史を記録として残すという役割りは、いかに時代が変わり、政権が交代しても続いていく。それだけに「休眠」がそのまま「終了」にならぬよう今後も努力していく必要があるだろう。

政治記者OB会常任世話人 阿部 穆 (産経新聞出身)

◆会議報告◆

第368回企画委員会

(9・4 宴会場)

新聞僚など今後のゲスト候補について協議した。

出席 船橋委員長、宮田(謙)、小此木、山田、中井(康)、脇、宮田(一)、菅沼、会田、田崎、影山、井田、和

第285回会報委員会

(9・7 シルバールーム)

8、9月号について意見交換した後、10月の編集を協議。年末企画と明年1月号の「新春随想」執筆者候補を次回委員会で決めることとした。

第361回会員資格委員会

(9・18 小会議室)

10月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。  
出席 森嶋、杉山、石川、田中、若松、今田、工藤の各委員。

第174回施設運営委員会

(9・28 小会議室)

7月、8月のアラスカ売り上げと貸室利用状況などを事務局から報告した。

出席 金平委員長、高橋、阿部、佐藤、鈴木、渡部の各委員。

リレーエッセー

佐藤番②



この夏、台北を旅した。故蒋介石總統を顕彰した国立台湾民主館(元中正記念堂)を訪ねた際、マツカーサー、朴正熙、吉田茂らと蔣總統との写真に並んで、佐藤栄作首相が蔣氏と会談する大きな写真が掲げられていた。

67年ごろ東南アジア訪問の際にでも訪台したのだろうか。約40年前の写真を眺めながら、隔世の感の佐藤番時代を思い出していた。佐藤番を担当したのは67年5月から68年1月までの約8カ月間。病氣辞任した池田首相の後任とし

て64年11月に首相となった佐藤氏は、67年1月の総選挙後に再選され、第2次内閣をスタートさせていた。既に佐藤首相の権力基盤は固まり、近寄り難い存在だった。「佐藤番」といっても、首相を遠巻きに追っかけている感じで、直接言葉を交わす

談の模様をただして、必要があればデスクや関連の記者クラブの担当者に電話連絡するのが日常業務だった。私はあまり熱心な番記者ではなかったのか、当時の記憶はおぼろだ。現役を退いた時にメモ類は処分したので、確かめる材料もない。

「番小屋」の日々、夢幻の如く

▼西村 多聞

ただ、首相は寛子夫人とともに週末は季節によって軽井沢か鎌倉で静養、番記者も同行した。それは思い

ことはなかった。後に国会の廊下などで立ち止まり、若い番記者たちと話したりするようになるのだが、私の頃は考えも及ばなかった。首相官邸では玄関わきの一室「番小屋」に待機し、出入りする訪問者に訪問の目的などを聞き、帰りには会

出のひとつだ。首相がゴルフをしている間は解放されるので、軽井沢周辺を散策、鎌倉では骨董屋をのぞいたりした。その時に入手した古そうな蕎麦猪口が今も手元にある。楠田実秘書官との出会いも、政治

記者としての心構えに影響を受けたと思っている。

当時わが社の佐藤番は羽原清雅、沼尻勉(故人)と私。この3人で楠田さんを囲んで1、2カ月に1回飲み会を持っていったが、そこで「政治記者」と「政治部記者」の違いをめぐって議論したことがあった。若気の至りではあったが、楠田さんの「政治記者」プロとしての思い入れのすさまじさに感銘したものだ。朝、楠田邸で食事をご馳走になり、秘書官の車の中で雑談しながら官邸に出勤したことも懐かしく思い出される。佐藤番の8カ月は、甲子園の夏のような、未熟で若かった遠い日の夢・幻の如し、である。

このシリーズは「総理番・佐藤首相」をキーワードにボタンをつなぎます

■2011年7月24日—テレビが突然消える日

岡村 黎明(朝日放送出身)  
地デジ問題からテレビを考える 家庭のアナログ受像機がデジタルに転換をせまられるまで4年を大きく切った。行政や局ではなく視聴者の視点からみると、とり残される弱者の姿が浮かび上がる。

期日のPRだけでは無為無策に等しい。ハードルが高い日本特有の状況にメス。

総務省、菅大臣(当時)、審議会の反応は、5000円のチューナー、無料配布、日本方式を南米へなど。個別の対応も重要だが、テレビをどう考えるかだ。ご意見を乞いたい。

(朝日新書 777円)

■この国の姿—藤原作弥のマルチ・エッセイ

藤原 作弥(時事通信出身)  
三角形の視座からの日本のアイデンティティー 私にとっては15冊目の著作だが、45年間にわたるジャーナリスト生活の「卒論」的な成果物でもある。私の場合、「満州体験」が人間形成の原点となっており、昭和史に関するノンフィクションも何冊

か書いてきた。さらに特派員としてのアメリカ体験も長かった。

そうしたバックグラウンドから常に日中間係と日米関係を主軸とした三角形の視座で「世界の中の日本」を考えてきた。その視座で「日本および日本人」のアイデンティティーをテーマにまとめたのが本書である。

(愛育社 2415円)

■つながる日本海—新しい環日本海文明圏を築くために

武藤 誠(朝日新聞出身)  
先人が築いてきた智慧 「表裏一体」というとき、表も裏も同じ価値をもっている。

日本には表と裏があり、裏は暗く劣っているといった使われ方がされた時代が、つい最近まであった。

でもそれは、数千年つづいた日本海をはさんだ大陸や朝鮮半島との豊かな交流の歴史からみると、ほんの一瞬に過ぎない。

日本の風土や日本人とは？ 目から鱗の物の見方や先人が築いてきたさまざまな智慧に興味のある方には、お奨めだ。

(現代企画室 2,625円)

月曜会のこと

創立メンバーの期待と願望

「物忘れ」がひどいの古い事は奇妙に覚えていられる——それは高齢のせいだと言われる。最近、私も古いことを思い出し時々ツツとしたりする。創立以来のクラブメンバーとして「古い話」の一つに「月曜会」と言う経済問題の広範なテーマを中心とし財界の首脳を交へて、気楽に懇談する勉強会があったことを書いておきたい。

「月曜会」は、会員が内々で呼び合っていた「懇談会」で日本記者クラブ発足より古く、クラブ発足と共になんと同時進行の形で、続いた。当時、朝日新聞論説委員、のち社長となられた渡辺誠

毅氏が、会長役で、一番若い私が連絡役の形で、格別の規約もなく、メンバーも「時の経済問題」によつて、参加者に変動があったが、常時7、8人が参加し、オフレコ(記事にしない)が原則で懇談内容も多岐で、有益だった。三木武夫元首相が出席した折、私の質問が一部誤って伝えられ、一部で話題となったこともある。

ともあれ、情報化時代の到来で、新聞記事を読むだけの平板なテレビ番組が横行する——昨今の風潮では望み得ないかもしれぬが、ジツクリと政治や経済や社会事象の底流を、追究する深味ある読み物や番組を期待するのは、私のような古いジャーナリストだけだろうか。

元東京新聞論説主幹 楓 元夫

○囲碁の会

夏休み明けの9月例会(29日)には17人が参加しました。優秀賞は4連勝の相川誠一会員、3連勝の友田錫会員、3勝1敗の佐伯晋、安田志郎の両会員でした。このところ参加人数の減少が目立ちます。次回(10月27日)は多数の出席をお待ちします。

△招待券▽ ご寄贈いただきました

▼日本経済新聞社 「BIOMBO 屏風 日本の美」「ベルト・モリゾ展」「印象派とエコール・ド・パリ展」

▼日本新聞博物館(横浜) 「九州発食卓の向こう側 西日本新聞創刊130周年記念展」



●時代を超え生きる感性

去る2月、フランスでこの映画が封切られると、観客動員数は8週間で人口のほぼ1割、500万人に達したという。意外だった。フランスでは1960年代以降アメリカのポップスが幅を利かせて、伝統的なジャンソンの影が薄くなっていったからだ。いったい、この映画の、そしてピアフの何が21世紀のフランス人をこんなにも衝き動かすのか。

スクリーンでは、まず、パリの下町でのピアフの貧しく惨めな生い立ちと少女時代が描かれる。母親に去られ、大道芸人の父親に娼婦館に預けられた小柄な女の子。路地裏で歌をうたって飢えをしのぐ日々。

エディット・ピアフ  
～愛の讃歌～



1935年、20歳のある日大きな転機が訪れた。有名ナイトクラブのオーナーに見出され、「ラ・モーム(ちび)・ピアフ(雀)」の愛称をもらって本格的な歌手人生が幕開く。世界的ボクサーとの燃える恋。コクトーやディートリヒとの交情。「愛の讃歌」「ばら色の人生」「ミロール」：ストーリー展開の節々には、圧倒的な声量で人生の哀歓をうたい上げるピアフの舞台が。

ピアフがガンをわずらって息を引き取ったのは1963年10月。47歳だった。ペールラシエーズの墓地での葬儀には4万人以上のファンが詰めかけ、パリの交通がマヒしてしまったという。彼女が活躍したのは第二次大戦中から戦後の50年代にかけて。この時代のファンといまのフランス人とでは世代も社会環境もかけ離れているのだが、ピアフへの愛情は衰えていなかった。フランス人の心のひだには時代を超えて生き続けるある種の感性が潜んでいて、それが、感傷を突き抜けた、しかも情感あふれる彼女の歌唱力に激しく感応するののか。ピアフ役を演じたマリオン・コティヤールの迫真の演技に胸を打たれた。

産経新聞出身

友田 錫

©2007 LEGENDE-TFI INTERNATIONAL-TFI  
FILMS PRODUCTION OKKO PRODUCTION  
s.r.o. SONGBIRD PICTURES LIMITED

●モンゴルの砂漠化

—中国の光と影

最近の中国映画には社会の現状を鋭くみつめ、その姿を民衆に訴えるものが目立つ。

この映画も内モンゴルの遊牧民の生活実態を通し、年々、砂漠化が進み、牧草を求めて移動する遊牧民は生計を立てていけなくなった有様を赤裸々に描き出している。

夫婦と子ども1人の3人家族。夫はモンゴル族の放牧生活をなんとかでも守っていかうとする。だが、草原の砂漠化は進み、放牧はままならぬ状態に追いやられ、子どもを学校へ行かせる金にも困る。女房は夫の反対を押し切って町へ出稼ぎに行

くが、その甲斐もなく、万策尽きた夫は愛馬を手放し、あてもなく草原を去っていく。

内モンゴル、そして遊牧民の物語と聞いていただけに、砂塵舞う砂漠のような情景から始まったのには驚いた。中国での砂漠化進行については理解していたつもりだが、こんなに酷いとは。

70年代末に内モンゴルに行っただが、当時は、フホトから車で十分の所へ行けば、もう緑の絨毯を敷きつめたような草原が果てしなく広がっていた。パオで羊の肉をこちそうになった。この映画を見る限り、緑の絨毯は夢物語になってしまふ。

砂漠化の原因は雨が少なくなっただけで、利益を求めて牛や羊の過剰な放牧で草原が荒らされ、さらに、漢民族が移住し、草原を畑に買えようと掘り返したことから、などによると言われる。

猛烈な勢いで経済発展しつつある中国だが、経済格差の拡大をはじめ、いろいろ深刻な問題を抱えている。光の当たる部分に目を奪われていて、本当の中国の姿は見えてこない。影の部分にも注目したい。この映画はそのことを教えてくれる。

朝日新聞出身

近藤 龍夫

白い馬の季節



## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われていま  
す。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてク  
ラブを利用しています。

### ■国際シンポジウム「2008年 東アジアはどう動く」

東アジアを取り巻く諸問題について、日米台の専門家  
3氏(上村幸治 獨協大学教授・元毎日新聞中国総局長、  
陳隆志 台湾新世紀文教基金会会長、シーラ・スミス  
米外交評議会上級研究員)が、日中関係や中米関係、台  
湾問題、朝鮮半島情勢などについて持論を展開した。(9.  
6 10階ホール)

照会先:(社)アジア調査会 Tel:03-3213-2697

### ■「みどりの大賞」審査委員会

福島民報社が、自然や環境の保全活動や研究などに取  
り組んでいる個人や団体を顕彰する「みどりの大賞」の  
審査委員会が開かれ、「三春さくらの会」が07年度の受  
賞者に決定した。国の天然記念物「三春滝桜」の保存活  
動に当たりながら「日本一のさくらの里づくり」を目指  
す活動が評価された。9月18日に紙上で発表され、28日  
に福島市内で表彰式が行われた。この賞は02年に創刊  
110周年を機に創設されたもの。(9.7 小会議室)

### ■日本産婦人科医会 記者懇談会

寺尾俊彦会長らが「周産期医療の現状と産婦人科勤務  
医の就労状況」について問題点を説明した。参加者は新  
聞・放送・通信などから約30人。奈良から参加した記者  
もあり、同県で妊婦が相次いで病院に受け入れを拒まれ  
て死産した問題に話題が集中。寺尾会長は、産婦人科医  
が絶対的に不足している点や当直回数が多く過酷な勤務  
条件にある実態などを語った。今後も月に1回、第2水  
曜日開催していく予定。(9.12 Cホール)

照会先:日本産婦人科医会事務局 Tel:03-3269-4739

### ■高松宮殿下記念世界文化賞

優れた芸術家に贈られる世界文化賞(日本美術協会主  
催)の07年度受賞者が発表された。音楽部門に選ばれた  
イスラエル人ピアニスト兼指揮者のダニエル・パレンボ  
イム氏など5部門(絵画、彫刻、建築、音楽、演劇・映  
像)の受賞者と業績が映像を使って紹介された。また若  
手芸術家奨励制度の対象には、イスラエルとパレスチナ  
の若手音楽家が集うワークショップ「ウエスト・イース  
タン・ディヴァン・オーケストラ」(指揮:ダニエル・  
パレンボイム)が選ばれた。(9.14 宴会場)

照会先:(財)日本美術協会 Tel:03-5832-6464

<http://www.praemiumimperiale.org/jp/jaahome/home.html>

### ■アジア・中東地域長期記者研修歓迎会

フォーリン・プレスセンターが対日理解を図るために  
招いた記者を関係者に紹介した。今回はモンゴルから2  
人(モンゴル公共ラジオ・テレビ、ウドゥルーン・ソニ  
ン紙)とラオスから2人(パテート・ラオ紙、ケーピー  
エル紙)の計4人が参加。約6週間の取材を通して日本  
に対する理解を深める。両国の大使も出席して歓談した。  
(9.19 大会議室)

照会先:フォーリン・プレスセンター Tel:03-3501-3401

### ■C-ALERT協議会 設立記者発表

84のケーブルテレビ局が、緊急地震速報サービスを推

## 新しいOB会員

進めるために「C-ALERT協議会」を設立したことを発  
表した。10月1日から気象庁が緊急地震速報の一般向け  
サービスを開始するのに合わせ、ケーブルテレビ局がセ  
ットトップボックスに接続した端末で速報を流すための  
技術支援などを行う。CATVの特徴である地域密着型サ  
ービスの向上を目指し、早い局は10月1日からサービス  
を開始、年度内に31000台の端末設置を目指す。(9.20  
大会議室)

照会先:ケーブルテレビ情報センター Tel:03-3549-0875

### ■シンポジウム「学術・軍縮・人道」

軍縮と人道援助を学術的視点から考えるシンポジウム  
が日本学術会議政治学委員会の主催、朝日新聞社の後援  
で開かれた。猪口邦子衆院議員が基調演説を行った後、  
猪口孝(中央大学)、加藤節(成蹊大学)、広瀬和子(上  
智大学)、五百旗頭真(防衛大学)教授らが学術の果た  
す役割について議論した。(9.22 宴会場)

照会先:日本学術会議事務局参事官(審議第一担当)付  
Tel:03-3403-5706 E-mail:s251@scj.go.jp

### ■欧州記者フェローシップ計画参加者歓迎会

日本新聞協会が欧州ジャーナリズム・センター(本部:  
オランダ・マーストリヒト)と協力して行う記者相互交  
流計画の参加者の歓迎会が行われた。来日した記者4人  
の所属はポリティケン紙(デンマーク)、フィンランド  
公共放送、ANSA通信(イタリア)、ヴェイダス誌(リ  
トアニア)。13日間滞在し、毎日新聞やテレビ東京を訪  
れた後、広島・京都なども訪問する。(9.25 大会議室)

**バー、レストラン、宴会**

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

**■吉富カクテル 10月から4色カクテル**

10月から毎月4種類のハーフサイズ・カクテルを始めます。食前酒にはもとより、少しだけカクテルを飲んでみたいという女性にも最適です。カクテルの王様・マティーニと女王・マンハッタンを常設とし、他に2種類のカクテルを月替わりでご用意します。10月は薄紫色が美しい「ブルームーン」とさわやかな色合いの「かすみ草 ベイビーズプレス」です。価格も420円とお手ごろですので、ぜひお試しください。

**和食****石焼懐石コース (11月2日まで)**

旬の松茸を使ったコースです。土瓶蒸しのほか、牛ロースなど一緒に“石焼き”でお楽しみください。5,250円(板長:薬料浩)

**洋食****ブイヤベースコース (11月9日まで)**

先月に引き続きマルセイユ風ブイヤベースのコースです。オードブル、サラダ、シャープレット、コーヒーのセットで3,360円です。ランチタイムにもどうぞ。(シェフ:黒須修一)

**8月の10階レストランのご利用に感謝します**

8月に行いました洋食夜の部の半額サービスをご利用いただきありがとうございました。これは会員の皆さんの日頃のご利用に感謝し、一般メニューの全品を半額で提供しているものです。3年目のことしは、これまでで最高の延べ498人にお越しいただきました。友人や家族とのプライベートな会食でのご利用が多かったようです。少し気が早いですが、来年8月にも行いますので、夏の夜のダイニングスポットの一つとしてぜひ覚えておいてください。(店長:池野司)

**<訃報>**

田中理会員(共同通信出身 77歳)が8月13日死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

**<会員現況>** 法人会員 146社 基本会員 810人  
個人会員 1650人 法人・個人賛助会員 70社 175人  
特別賛助会員 74人 名誉・功労会員 9人  
計 216社 2,718人

**クラブの電話 ダイヤルイン**

|               |                       |
|---------------|-----------------------|
| 和食レストラン (9階)  | 会員事務                  |
| 3503-2723     | 3503-2725             |
| 洋食レストラン (10階) | 経 理                   |
| 3503-2766     | 3503-2728             |
| 貸室予約、宴会打ち合わせ  |                       |
| 3503-2724     |                       |
| 受 付           | 会見申し込みアドレス            |
| 3503-2721     | kaiken@jnpc.or.jp     |
| クラブ行事への申し込み   | URLアドレス               |
| 3503-2722     | http://www.jnpc.or.jp |

**会報委員会**

委員長=住田良能

委員=池谷 忍 石田昭彦 上村幸治 國府一郎  
竹居照芳 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

**会員名簿作成についてのお知らせ**

今年も11月1日付で会員名簿を作成します。個人D会員、特別賛助会員の方で住所、勤務先など名簿に記載されている内容に変更がある場合は、事務局へお知らせください。自宅情報、勤務先情報は名簿に掲載しないこともできますので、ご希望の方はその旨をお知らせください。また、個人情報があるので会員名簿は送ってほしくないという方もいるようです。そうした場合は事務局へご連絡ください。

担当 斎藤、河野 電話 03-3503-2725

**■法人会員代表変更**

▼西日本新聞社 多田昭重代表取締役社長(旧・清水晃氏) ▼AFP通信社 CAMPION, GILLES東京支局長(旧・AGRET, PHILIPPE氏) ▼新潟放送 竹石松次代表取締役社長(旧・牧野庄三氏)

**下野新聞がプレスセンタービルに入居**

下野新聞東京支社が9月3日、プレスセンタービルに引っ越してきました。場所はクラブの一つ下の8階です。「便利な場所に移れて、心機一転、皆張り切っています。これまで以上にクラブ施設を利用させてもらうことになると思いますので、会員の皆さんよろしく願います」(長島悟支社長)。

**ロッカーの点検と傘立ての整理をします**

ラウンジ内とレストラン側のクロックにあるロッカーの点検を行います。有効にご利用いただくため、ロッカーのご利用は当日限りとさせていただきますが、一部で長期間使用されている方がいらっしゃるようです。10月27日(土)の営業終了後、使用中のロッカーを開けさせていただきます。利用されている方は当日までにお引き取りください。併せて、傘立てに残っている傘も整理いたします。お心当たりの方は早めにお持ち帰りください。

HP <http://www.jnpc.or.jp/>**「会見速記録」：9月の新規掲載**

- 唐沢祥人 日本医師会会長「国民医療を守るために」(2007. 8. 24)
- 片山善博 慶応大学大学院教授(前鳥取県知事)「地方分権は進んでいるか」(2007. 8. 23)
- アレクサンドル・N・ヤコブレフ ソ連共産党政治局員兼書記「ベレストロイカの本質と日ソの新しい対話」(1989. 11. 15)
- 彭真中国全国人民代表大会常務委員会委員長「中ソ正常化は歴史発展のすう勢」(1985. 4. 25)

**今後の行事予定 (10/2現在)**

- 10. 18 (木) 15:00~16:00 (10階ホール)  
緒方貞子 JICA 理事長 記者会見
- 10. 19 (金) 12:00~13:30 (10階ホール)  
W・カトラー USTR 代表補 昼食会  
15:00~16:30 (10階ホール)  
研究会「HIV/エイズ」②  
稲場雅紀・アフリカ日本協議会ディレクター
- 10. 23 (火) 15:00~16:30 (9階宴会場)  
研究会「アフガニスタン農村の現状」  
中村哲・ペシャワール会現地代表
- 10. 24 (水) 12:00~14:00 (10階ホール)  
T・シーファー 駐日米大使 昼食会

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

# 写真回廊

撮影 丸山 博 (毎日新聞東京本社  
写真 真 部)



千葉県鴨川市の大山千枚田 刈り取られた稲穂が夕日に輝く (9. 8)

## 瑞穂の国の癒し系

過疎化。景観保存。自然保護。グリーンツーリズム。実りの秋。里の秋。田毎の月……。収穫を迎えたこの棚田風景の写真をながめていると、瑞穂の国の農村変遷にかかわる数々の言葉が連想ゲームのように浮かんでくる。狭い一枚の田で、稲刈りに励むのは地元農民と農作業にあこがれて来た都会の市民だ。棚田はとりわけ都会に住む人々に郷愁を誘い、日本人の心の原風景として癒し効果があるのだと思う。

千葉県・房総半島にあるこの棚田は農水省の「棚田百選」に選ばれた景観を誇るが、そこにある、ゆったりとした時間の流れも人の心を癒してくれるのだろう。自然の癒し効果に関しては「自然は直線を嫌う」という言説がある。そういうわれれば、なるほど、と感じ入る。が、一方で、曲線を描いても曲球(クセダマ)の飛び交う人間の営為の政治の世界は見ていてほとほと疲れるばかりだ、と滅入ってしまう。

安倍首相の突然の辞任に端を発した、政変は福田新政権を生んだが、構造改革、競争原理の旗印ばかりでなく、今度こそ、癒し系の政策も怠りなきよう願いたいものである。厳しい国際環境の中で、国家的重要課題が多々あるのは十分承知している。しかし、国民の生活実感とかけ離れた政策ばかりだと、社会の不満は解消しない。国民に「田毎の月」をめぐる余裕は生まれにくい。新政権には癒し系を求めている世相、社会の息遣いに敏感な政治を期待したい。

(清本 修身)